荒廃する糸島の森林

特集　森林保全

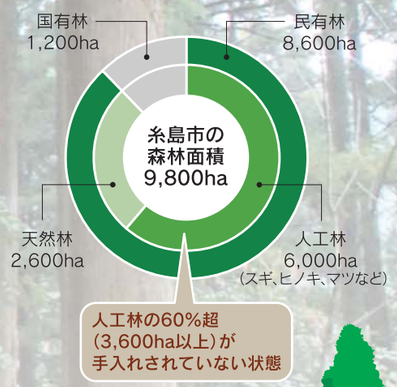
山々からのSOSにどう向き合うか

糸島市の森林面積は、総面積の約45%に当たる約1万ヘクタールを占めています。しかし、ひとたび森林に足を踏み入れると、人の管理を受けることなく荒れ果てた多くの山々を目の当たりにします。先祖代々守り継がれ、緑豊かで風光明媚な糸島をつくり出している山々は、実は、衰えゆく現状に人知れず悲鳴を上げているのです。

森林の保全に不可欠な作業「間伐」

現在の山の惨状について、手塚敏彰さんは次のように警鐘を鳴らしています。「定期的に管理された山の木は、しっかりした良材となる上、太陽の光が適度に入って下草などが元気に育ち、腐葉土も出来て山が健全な状態となる。雨が降ってもスポンジのように地中に吸収され、ゆっくりと河川に流れることにより、洪水や渇水が緩和される。一方、間伐されず荒れた山の木は、ひょろひょろと痩せ細ってしまっている。これでは根が張らず、強風ですぐに倒れてしまう。また、保水力が低下し弱った土壌では、いつ土砂が流出してもおかしくない」。

【糸島市内の森林面積の内訳】



間伐されず、衰えゆく山々

では、なぜ適正管理が行われず放置される山が多いのでしょうか。「かつては成長した木を住宅資材として使う他、間伐材も薪や炭にしたり、建築現場の足場や養殖筏などさまざまな木工製品として利用し、資源としてうまく循環させていた。時代の流れで木材を使わなくなったことに加え、外国産の安価な木材が流通する中、国産木材の価格は低下の一途。捨て値同然の間伐材では利益が生まれない」と現状を嘆く手塚さん。

結局、山を管理する人が減る→手入れされない森林が荒廃する→痩せた木々しか育たない、という悪循環が生じ、山々は「手入れされない」ことによって危機的状況に陥っているのです。

間伐に対しては、国・県・市から補助金が出ていますが、それでも赤字を補てんできないのが現状なのです。

子や孫に明るい山を残そう

いかにしてこの悪循環を打開すべきなのか。手塚さんは、「まずは、労働力を集約し環境を整えることが急務。山間に作業道を整備し、既存の広域林道へつなぐなどして、間伐・搬出を効率よく行うべき」と強調しています。

糸島市では、高祖・雷山・長野の3か所にモデル林を所有し、糸島市林業研究クラブの協力のもと作業道を整備し、適宜間伐作業を行い、光が差し込む明るい環境をつくっていますが、面積にして全体の数%に過ぎません。

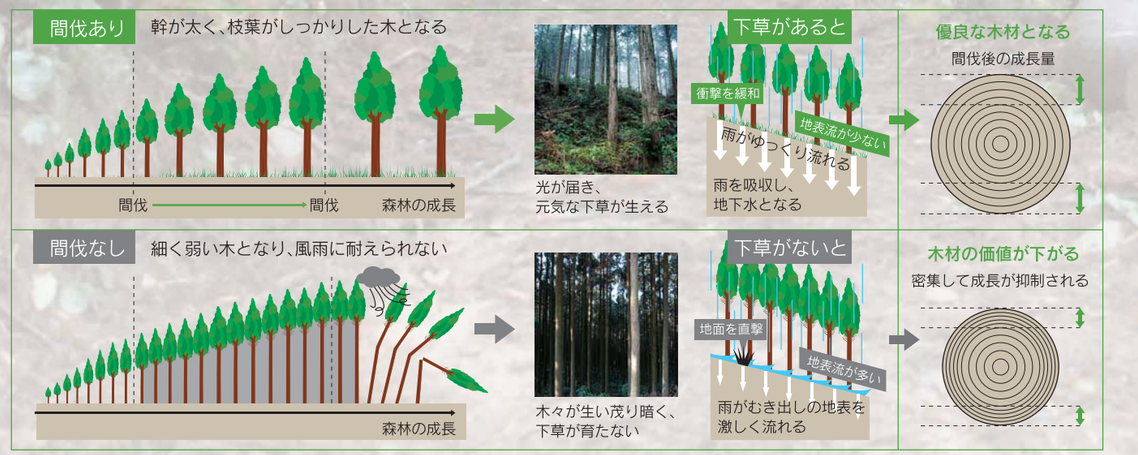
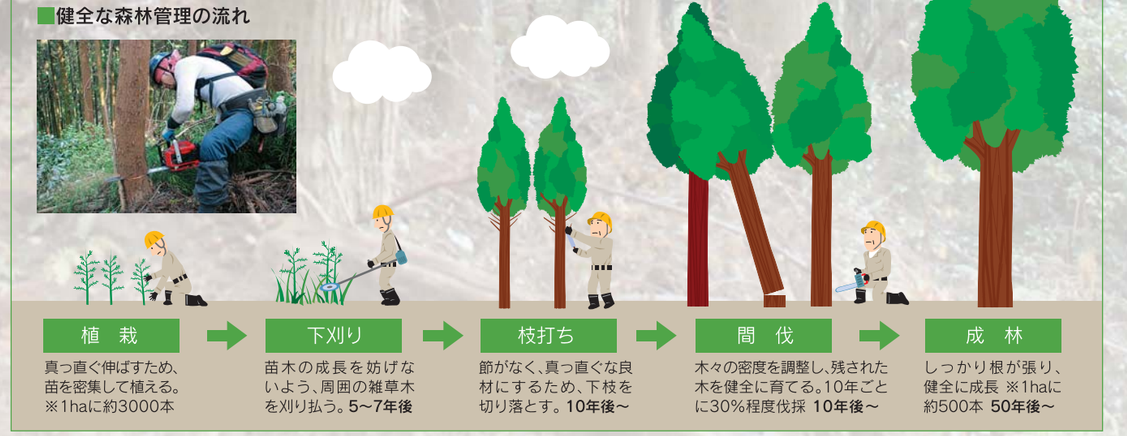
「みなさんに山の現状を知ってほしい。今の惨状は、林業関係者だけが抱える問題ではない。先祖が守ってきた自然環境を保護することは、未来の私たちの暮らしの基盤をつくることでもある」。

まずは山の実態を知り、自分に何ができるのかを考えてみませんか。

「本来なら、1歳から100歳までの木が満遍なく育っていないといけないのに、今の糸島の山の木は、50～60歳がほとんどで、それより若い木はほとんどない。先祖が守ってきた森を、健全な状態で次世代に伝えたい」

手塚（てづか） 敏彰（としあき）さん

15年以上トンカチ館(ファームパーク伊都国内)での木工指導の他、ボランティアで森林保全に関する啓発活動を随時展開中。糸島市林業研究クラブ副会長としても、積極的に間伐・林道整備などに関わっている。



■健全な森林管理の流れ